



国体の記憶 ②

絶対に負けるものか！

このコーナーに登場してくれる人を募集します。
くわしくは広報課(☎20-15003)へ。



数センチの差が勝負を分かつ
(上から2番目が伊藤さん)



伊藤 京子さん(旧姓・高橋)(新妻)
北海道池田町生まれ。高校1年から、スピードスケートで9年連続国体出場。500メートルで7回優勝

「よいい…」
この一瞬に全神経を研ぎ澄ませます。スタートいかんで、タイムに雲泥の差が出る世界。得意のロケットスタートで、女子スピードスケート界に君臨し続けた。
スケートと出会ったのは9歳のころ。練習場は、牧場だった自宅の敷地内にある池だった。
「北海道の冬は寒いので、外での遊びといえば、スケートくらいしかありませんでした」
競走馬を育成していた父は、子のスケート指導にも熱心だった。常にストップウォッチを片手に握る父の姿が記憶に残っているという。
持ち前の集中力で、すぐに頭角を現す。始めて1年で学校代表に。高校1年から9年連続で国体に出場し、500メートルで7回の優勝と、抜群の成績を残す。
「高校1年で国体に初出場したときのことは、今でも鮮烈に覚えています」
競った相手は、オリンピック候補選手をはじめとする、社会人の並ぶ強豪たち。完全になめられていた。しか



力強い滑りでオリンピック候補選手にもなった(写真中央が伊藤さん)

し、高校生だからといって、臆することとはなかったという。
「スタートラインに立てば、大人も子どもも関係ない。絶対に負けるものかという強い気持ちでした」
スポーツは、50%がメンタルだと言いつける。根っからの負けず嫌いの性格が、競技人生を支えた。
引退後は、スケートから距離を置いている。選手だったころは、周りから支えてもらうことが当たり前という感覚だったが、社会に出て、周囲のサポートのありがたさが分かったという。
現在、心と身体のケアを提供する会社を経営する。口コミで評判となり、実業団の選手や運動部の学生などが多く訪れる。
「国体をはじめとする競技人生で培った経験を、若者に伝えていきたい」
選手時代に味わった勝利の喜びよりも、自分を頼ってくれる人に尽くす充実感が大きいという。使命感にも似た感覚が、今のパワーの源だ。

編集後記

思わぬところで思わぬ影響が出たときなどに使われるのが、「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざです。先月のアイスランドの火山噴火の直後に、本市の“炊き出し”まで連想できた人は果たしていたかどうか。その後、市をはじめさまざまな人たちが、空港で足止めとなった外国人の支援に当たったことは新聞・テレビで連日報道された通りです。世界中に影響を与えたこの事件、噴火で儲けたとはいかないまでも、成田市の「おもてなしの心」を、国内はもちろん全世界にPRできたことは間違いなさそうです。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。